

現れ出たズボフと帰ってきたエンゲルス

東海自治体問題研究所理事長
市橋 克哉

2021年はどんな年でしたでしょうか。

デジタル関連法が制定されたりデジタル庁が発足したりと、過ぎし2021年、日本も本格的なデジタル時代に入りました。旧年を振り返りながら、新年を迎えるにあたり、わたしはこのデジタル時代について考えています。

時代の本質を、しかもその急所で掴むことは言うは易し行うは難しですが、その手掛かりを提供してくれる二人の人物がいます。

現れ出たズボフ

その一人は、日本語版を含む各国語版が出版されて世界的ベストセラーとなっている『監視資本主義 人類の未来を賭けた闘い』（東洋経済新報社）をものし、デジタル時代の資本主義批判の旗手となって現れ出たショシャナ・ズボフです。

彼女は、現在の資本主義についてこれを監視資本主義と命名し、先行する資本主義の諸段階（産業資本主義・独占資本主義等）とは区別される資本主義の「一つの段階」（ならず者的変異の段階）をそこにみています。そして、監視資本主義が人間を客体化（原材料）して貶めるディストピア（暗黒の世界）であると暴露します。

日本語版は700頁を超え、しかも独特の新語満載で、読者泣かせの大著ですが、それらの新語のなかで「行動剰剰」という言葉に、わたしは惹きつけられています。

ズボフ自身も、Googleによる「行動剰剰」の発見から監視資本主義が始まったと考え、「監視資本主義は、人間の経験を、行動データに変換するための無料の原材料として一方的に要求する」（8頁）と述べています。そして、ズボフは、膨大な行動データが、「行

動剰剰」（労働対象）となり、AI（労働手段）を装備した生産過程に投入され、瞬時に（agilely）、「予測製品」（人間の行動を予測し、ナッジ（意識させないで後押し）する商品（ターゲット広告、データマイニング、ポケモンGO等））に加工されるという、監視資本主義の資本蓄積様式に注目します。

わたしも、日本語版の翻訳に従って「行動剰剰」と書いていますが、原文はbehavioral surplusです。surplus value（剰剰価値）やsurplus labor（剰剰労働）といったマルクスの用語に馴染んだ人にとってはsurplusは「剰剰」と翻訳されてきた言葉です。これに倣うと、behavioral surplusは、「行動剰剰」と訳されることとなります。

監視資本主義によって一方的に強奪されるデータ化した「人間経験」について、ズボフはこれを「行動剰剰」と呼んで、プライバシー保護の観点から厳しく規制することを要求しており、彼女が創作した「行動剰剰」は、「ならず者的変異」に冒された現代資本主義の病理を鋭くつく言葉だと、わたしは思います。しかし、残念ながら、彼女が用いる「剰剰」という言葉は、「有り余る」という国語的な意味以上のものではありません。

帰ってきたエンゲルス

特別の意味をもつ「剰剰」という言葉を使って監視資本主義における「行動剰剰」とその病理を語るズボフの議論について、時代をつかむその画期的意義を認めつつも、なおその分析のあいまいさに満足しない英語圏の社会科学者のなかには、「行動剰剰」について、これを莫大な利潤を生み出す「剰剰労働」として位置づける議論を行う者がいます。その

代表的論者として、ディミトリオス・キヴォティディスがあります。残念ながら、彼の論文の邦訳はありません。関心をおもちの方は、下記のホームページのPDFで参照してください。

1213-Article Text-5232-1-10-20201127.pdf

彼らが依拠するのは、マルクスがその死によってかなわずエンゲルスが替わって編集した『資本論』第3巻が展開する「利潤率の傾向的低下の法則」（第13章 - 第15章）であり、そして、エンゲルス自身が執筆したこの法則に対する「対抗的要因」としての「利潤率に対する回転の影響」（第3巻第4章）です。

エンゲルスは、近時マルクスの見解を単純化したり歪めたりしたという批判にさらされて、その評価を落とした面もあったのですが、デジタル時代を迎えて、彼の議論は再び注目を集めています。まさに、「帰ってきたエンゲルス」です。

エンゲルスは、次のように述べています。「回転時間の短縮、またはその二つの部分—生産時間と流通時間—・・・の短縮は、生産される剰余価値の総量を増大させる。・・・このような短縮はいずれも利潤率を高めるといことは、明らかである。」（『新版 資本論8』123 - 124頁）。

エンゲルスは、剰余価値の総量を増やすことで利潤量を増大させ、これによって利潤率の低下を埋め合わせようとする資本の必然的傾向を語っています。監視資本主義における資本の蓄積様式に、エンゲルスのこの議論を当てはめると、次のようになります。

第一に、生産領域では、GAFAs等の監視資本から「サービス」の提供を受ける「対価」として、サービス利用者は、自らの経験を行動データに変換してこれを「行動剰余」（剰余価値を生む労働力商品）として監視資本に渡します。そして、監視資本は、集積した膨大な「行動剰余」をAI装備の生産過程のなかで「予測製品」に加工します。この生産領域における回転時間は瞬時に完結し、極超高速で生産は回転を繰り返します。

第二に、流通領域では、生産された「予測製品」は、デジタル監視、データマイニング、ターゲティング広告等の「コミュニケーション」（交通手段）によって瞬時にこれを求めるサービス利用者届けられます。流通もまた極超高速で繰り返し回転するのです。

したがって、生産領域でも流通領域でも極超高速回転を繰り返す監視資本は、剰余価値の総量、すなわち、利潤量を増大させ、当面は、利潤率の低下を抑えることができます。したがって、今日の資本主義が、極超高速回転によって利潤を増大させる監視資本主義に活路をみいだしたいと考えるのも当然です。

しかし、将来、AIという新技術がGAFAs等の特定の監視資本を超えて一般化すると、市場価値は彼らが享受していた個別価値まで下がる結果、利潤の増大はなくなり利潤率も低下します。キヴォティディスは、ここに、極超高速回転する資本が突っ込む「太鼓橋」（減速できず事故（恐慌）を招く橋）をみています。

特殊のなかに普遍をみる

本格的なデジタル時代に入った昨年、監視資本主義批判の旗手として「現れ出たズボフ」、そして、資本の回転時間の短縮に利潤率低下の対抗要因をみる議論が評価され、再び「帰ってきたエンゲルス」、この二人の議論に刺激を受けたわたしは、新年を迎えて次のように考えています。

本質は変化のなかにあらわれる、つまり、「特殊」（形態・段階）のなかに「普遍」（本質、継続）をみる視点をもちたいものです。

監視資本主義であれば、ズボフに学んで、これを先行する諸形態とは異なる段階にある資本主義とみることで、そこに生成する特殊性を明らかにする、そして同時に、エンゲルスに学んで、そこにも資本主義の普遍的な基本命題が貫通していることを確認したいと考えています。